

景行天皇記に於ける倭建命

大久間喜一郎

一 前書き

古事記の中で倭建命の物語ほど我々の心を打つ物語は他には無い。その剛毅な振舞いにより、父の帝から遠ざけられ、単身で西征の旅へと赴く。父、景行天皇の命のままに熊襲の首長を滅ぼし、山川の神・海峡の神々を平定し、帰途には出雲の首長をも滅ぼして帰京するが、幾時^{いくとき}も経ずして東の方十二道の平定を命ぜられ東国へ赴くこととなる。この東征に先立って、伊勢神宮に在った姨の倭比売命に逢って「天皇既に吾死ねと思ほす所以^{ゆゑ}か、何しかも西の方の悪しき人等^{ひとら}を撃ちに遣はして、返り参上り来し間、未だ幾時^{いくとき}も経らねば、軍衆^{いくさびとら}を賜はずて今更に東の方十二道の悪しき人等^{ことむ}に遣はすらむ。これによりて思惟^{おも}へば、なほ吾既に死ねと思ほしめすなり」と嘆きつつ出で立ってゆくのである。そして東征の事を終えて帰途に就くが、病を得て三重の能煩野で崩じた。猛々しい剛毅な英雄として描かれている倭建命も、神とは程遠い一個の人間であるが故の悲しみを持っていたのである。振舞いは神に等しくとも心は人間であるというの

が英雄の姿である。こうしたことから、倭建命が英雄として論議される一方、王権の権化とも言うべき日本書紀における日本武尊像は余りにも異質であり過ぎる。また、常陸国風土記その他に見える倭武天皇或いは倭健天皇の記事などは、倭建命を天皇と信じていたことが知られる。そうした倭建命の実態に迫ろうと数々の論考が発表されてきたが、特に吉井巖氏の諸論には今の私にとって傾聴すべきものが多い。敢えて異を唱える結果にはなっても、本稿はその吉井論文を参考にしつつ筆を進めて行きたいと思っている。

一 景行天皇記・紀の中のヤマトケルノミコト

古事記・景行天皇記を見ると、記述の中心は専ら小碓命つまり倭建命の事績にあつて、父の景行天皇は影の薄い存在となつている。景行天皇に関わる記述は初段の後妃とその御子についての系譜記事以外にはみるべきものが無いと言つて好い。一方、日本書紀の場合では、景行天皇自身による熊襲平定の記事に多くの紙数を割き、倭に帰還してからも武内宿禰に北陸および東国の情勢を視察させる。そして、再び熊襲の反乱に際して、御子の日本武尊を派遣して熊襲平定を命じる。御子が討伐のことを終え、倭に帰還してから十二年後、東夷が辺境を乱すに至り、再び日本武尊をして討伐を命じる。皇子は蝦夷平定を果たし、帰途甲斐の国より尾張に至り、能褒野で崩じた。それより十年後、景行天皇は日本武尊の平定した東国を巡察した。それより七年後に景行天皇は志賀の高穴穗宮で崩御した、というのが書紀の記述の概略である。此の中には、古事記において倭建命の望郷の歌として名高い思国歌くしのうたは、景行天皇が日向に在つて京師を偲んで作つたとしてゐる。

一体、倭建命という人物は実在したのであろうか。実在を否定することは簡単である。古事記と日本書紀とにおける

倭建命の人物像が甚だしく異なっているといふことも、その要因とならう。また、古事記の場合では、西征においても東征においても殆ど部下も無く率いる軍旅もなく、只一人で敵を制したかのように叙述されている。現実には在り得べからざることである。しかし、古代の英雄物語には屢々見える語り口であるという反論があるなら、神武を始め諸々の天皇の戦闘にあつては、軍隊の登場は当然のこととして叙述されている。更に日本書紀の場合で言えば、日本武尊には一・二の有力な部下を添えて西征や東征が行われる。しかし、よく検討すると、敵を減ぼすのは日本武尊一人の働きである。こうしたことから倭建命の實在を疑ふことは、資料に特定の解釈を加えない限り、自明なこととも言える。

また記紀における構成上の問題で言えば、古事記の場合は景行天皇記というよりは倭建命記であり、書紀の場合は景行天皇と日本武尊との事績は屢々重なっている。これを具体的に言えば、前半の熊襲征伐は景行天皇が先に行い、後に日本武尊が行う。後半の東夷討伐は日本武尊が行い、後に景行天皇が巡狩の形でそれをなぞる。景行天皇にせよ日本武尊にせよ、一人の事績を強いて二人で分け合つた感がある。そうだとすると、古事記のように倭建命一人の事績に終始する構成も納得出来る。考えように依つては、景行天皇のイメージと日本武尊のイメージは重なつてしまふのである。また更に、それに連なる問題として、常陸国風土記に何度か姿を見せる倭武天皇のことも考慮に入れねばならない。

倭武天皇とは倭建命のことで、実際には天皇であつたとする説は納得出来ないわけではない。この点について吉井巖氏は書紀の倭建命系譜の記述を問題にして、

この系譜記述は、かつてある段階で倭建命が天皇として処置せられていた段階があり、その段階ですでに一代の御記として系譜記述と東西平定の事績とが整備せられており、記紀完成の段階では、倭建命は天皇の系列からはずされ景行皇子として定着するに至るのであるが、云々

と述べていて、現存記紀以前の或る段階で倭建命が天皇として扱われていたことがあつたことに言及された。その考察

は容易に否定できないながら、本稿では敢えて別の面から眺めてみたい。

播磨国風土記には楯保郡の記事に「宇治の天皇のみ世」という語がある。これは仁徳天皇の兄、宇遲能和紀郎子だと考えられている。古事記によれば、父の応神天皇から「宇遲能和紀郎子は天津日繼を知らしめせ」と言われていたが、早世して天皇にはならなかったと記されている。天皇の立場で政務を見ても、天皇の数に加わらない飯豊青皇女の例もあるのだから、宇遲能和紀郎子が天皇で無かったとは言えない。ただ倭建命の場合には記紀共に景行天皇の第一夫人の御子としてのみ記されている。

常陸国風土記に見える倭武天皇の巡狩記事は、常陸国総記・信太郡乘浜・茨城郡桑原岳・行方郡総記・行方郡当麻里・行方郡芸都里・行方郡波須武野・行方郡相鹿里・香島郡津宮・那賀郡角折浜・久慈郡遇鹿・多珂郡飽田村・多珂郡藻島などに散見する。殆ど各地に跨がっていると好い。しかしこれらは、あくまでも古代伝承としての叙述であって、歴史的人物としての景行天皇であったり倭建命であったりする根拠は殆ど無いのである。ただ我々は倭武天皇の名から倭建命を考え、その父親とされる景行天皇のことを連想するに過ぎない。

元明天皇の和銅六年（七一三）畿内七道諸国の国庁に命じて、郡郷名に好字を著けること、産物の名を具さに記録し、また土地の沃瘠及び山川原野の名号の由来・古老の伝える旧聞異事を奏上せしめたのが、古風土記の成立であったことは周知知られている。しかし、諸国が編述の作業を終えて中央に奏上した期日はまちまちであったろうとされる。だが、序文を信すれば和銅五年に奏上されたとする古事記を参考にしたり、古事記と対比してその内容を検討したりする余裕も、或いはその必要も、更には中央からの指令も無かつたはずである。それ故、倭武天皇に関する伝承も倭建命の東征と辻褄を合わせる意図などは無かつたと思われる。但し、中央では地方官などを通じて早くから知っていたのではないかと思われる。

天皇という表記は「すめらみこと」或いは「すめろき」と言う語を漢字表記したものととも考えられる。万葉集卷十三・三三二の長歌に、「こもりくの／泊瀬小国に／よばひせす／我がすめろきよ／奥床に／母は寝ねたり(下略)」とあって「よばひせす／わがすめろきよ」の「すめろき」という語は、必ずしも天皇という社会的地位を意味しているわけではない。殊に地方にあつては、例え律令時代であっても天皇そのものを指しているとは限らない。最高の支配者であるなら、それは「すめらみこと」であつたと想像される。したがつて倭武天皇とあるから、倭建命は実際には天皇として即位したのでらうと考えるには及ばないかも知れない。

更に、市辺の忍齒王の王子、意祁と袁祁に纏わる王子流浪譚の場合は、播磨国風土記に見えるような在地伝承が種となつて、記紀に採録され、やがて顕宗・仁賢の二天皇に結び付けられたのではないかということ、かつて論じたこと(2)がある。地方で語り継がれた伝承が名高くなつて中央へ流入してくると、史実として取り上げるといふことは水江の浦島子の話ばかりでは無いと考へねばならない。倭武天皇の伝承も常陸国で発生したものが中央に入つたと、単純に決める訳にはいかないが、中央で語り継がれた倭建命の伝承が地方へ伝播したと言ふなら、常陸国風土記の倭武天皇の伝承の中に東征的な要素が少しも無いというのは納得出来ないことである。それは出雲国風土記に見える大穴持命・須作能乎命・伊弉奈彌命などといった神々の行跡は、大和朝廷で作つた記紀神話に倣つたものとは決して言えないということを考えれば、ある程度の推測が成り立つと思われる。つまり、出雲国風土記の伝承の中から大和朝廷は記紀神話の神々を借用したのである。こうした出雲国風土記と記紀神話との関係を、常陸国風土記の倭武天皇伝承と古事記・景行天皇記の倭建命伝承との関係に置き換えてみたらどうであらうかということなのである。

さて以上述べてきたことから、倭建命が果して天皇であつたのか、或いは架空の人物であつたのか、その点を明らかにする一助として、古事記に見える皇位継承の次第を検討してみたいと思ふ。

二 皇位継承次第

神武天皇	鵜葺草葺不合命の子
綏靖天皇	神武天皇の子
安寧天皇	綏靖天皇の子
懿徳天皇	安寧天皇の子
孝昭天皇	懿徳天皇の子
孝安天皇	孝昭天皇の子
孝霊天皇	孝安天皇の子
孝元天皇	孝霊天皇の子
開化天皇	孝元天皇の子
崇神天皇	開化天皇の子
垂仁天皇	崇神天皇の子

景行天皇	垂仁天皇の子
(倭建命)	(景行天皇の子)
成務天皇	景行天皇の子
仲哀天皇	倭建命の子
応神天皇	仲哀天皇の子
仁徳天皇	応神天皇の子
履中天皇	仁徳天皇の長子
反正天皇	仁徳天皇の第三子
允恭天皇	仁徳天皇の第四子
安康天皇	允恭天皇の第四子
雄略天皇	允恭天皇の第七子

以上の表は三種類の形態をもっている。親が天皇で子がそれを継承してゆく場合と、兄弟で継承してゆく場合と、次に抜いたような変則の場合とがある。この変則の場合というのは、天皇として即位せず皇子の儘ながら、その子が天皇として即位している例である。これは伝承の誤りとか、系譜の混乱とか、そうしたことがあるのではないかと疑わせる。

景行天皇	垂仁天皇の子
(倭建命)	(景行天皇の子)
成務天皇	景行天皇の子
仲哀天皇	倭建命の子

この倭建命が天皇として即位していたら、景行天皇の御子は仁徳天皇或いは允恭天皇の御子の場合のように、兄から弟へ皇位を継承して行くことになり、古いしきたりに反することになる。それを否定しようとすれば、成務天皇を挿入として抹殺せねばならなくなる。何故、成務天皇を挙げたかと言えば、これは旧辞傳承の無い天皇であり、事績も無いし御子も一人だけで、その御子は帝位に即かない。古事記の構成法からすれば、天皇があり皇子があり、皇子の中から次の天皇が定まるといふ形を採っているのだから、皇子があっても天皇にならなければ、天皇系譜の上ではその天皇は無くとも史的叙述には困らない筈である。そこで二つの問題が提示される。それは倭建命が天皇にならなかったのは何故かということと、それと関連しつつ成務天皇は何故皇統に籍を置かねばならなかったかということである。その二つの問題を併せて考えてみたい。

三 倭建命は何故天皇にならなかったのか。

この問題については、西征も東征もこれは行政に類した政治行為であると考えられる故に、天皇自身の行動である必要は無い。行政の直接の責任者は皇太子である筈である。古事記では倭建命が太子ひつぎのみかこの一人であると記されていて、西征・東征の責任者であったと考えられる。倭建命の西征・東征が何らかの史実に基づく仮託であって、たまたまそれが倭建命を以て代表せしめたにしても、全くの架空であるとは考えられない。崇神・垂仁が倭にあって、外征を行ったらしい伝承が見られないのに対して、景行天皇は書紀に拠れば、治世の十二年から十九年までは熊襲平定の為に筑紫へ幸した。

また、二十五年には武内宿禰をして北陸及び東国を視察させたとある。

この天皇は神武は別として、外征に終始した天皇である。天皇というよりも武將の倂を持っている。そして次の成務天皇は業績の程も貧しいが、またその次の仲哀天皇に至っては、海外遠征の意図が示される。尤もこの天皇は古代史家に言わせれば、架空の天皇だと言う。それはともかくとして、その仲哀天皇は神の言葉を疑って崩御し、後の神功皇后によってその意思が遂行される。「初国知らずすめらみこと」と言われた崇神天皇及びその子垂仁天皇までは、天皇として都を離れることは無かった。ところが景行天皇に至って、諸国平定に熱意を示す天皇として、書紀では自ら外征に従う。思い掛けぬ程の変貌である。そうした外征に執心する天皇に相応しい皇子が出現する。それが倭建命であった。

日本書紀に依れば、景行天皇の事績は熊襲討伐に始まる。しかしながらこれは景行天皇の英雄振りを示すものではない。天皇として討伐を行ったというのみである。桃太郎や頼光の昔話ではないが、敵を制圧し、その息の根を止めるのは英雄の行動がなくてはならない。そうした英雄として活躍するには、天皇という地位を以てしては不自然である。もっと自由な立場が欲しい。それには天皇の意思を代行する上で、天皇に出来るだけ近い者でなければならぬ。そのようにして倭建命なる人物が設定されたと考えられる。意思の上では天皇の代行者であり、行動の上では自由な一個の英雄である。

さて、倭建命の名は何処から来たものだろうか。物語の上では、古事記は熊襲建と称する二人の魁師（ひとこのかみ）の中の兄の熊曾建は、倭建命に誅戮されるに際して、大倭国の中で吾らより強き者として倭建御子という名を奉って死んだという。また書紀では熊襲の魁師川上梟師たけらが同じく日本武皇子の名を奉ったことが、この皇子の名の由来だという。しかしこうした話は地名起源説話のようなものであって、事実あるいは事実らしさというものではない。倭の国の中の強者という意味で始から用意された名であったと思われる。その倭の国は、次第に版図を拡張し、やがて統一国家と

なつてゆく訳だが、その版図がどの程度であつたかは別として、日本国の意味であつたことは間違いないと思う。それ故、倭建命の名前の意味は、日本国における最も強く猛々しい人間の意味であつたらうと考える。

日本で一番傑れた英雄であつてこそその版図を拡張してゆく主役に相応しいのである。したがつて版図拡大を志す景行天皇が天皇故に表出するのを憚られた英雄性を、倭建命という皇子をもつて表現したと考へても好いのである。二人の天皇の存在は許されない故に、倭建命が天皇であれば、景行天皇の出る幕も無くなる。景行天皇と倭建命は二にして一であり、同じ天皇代に天皇と皇子という関係でこの二人を立てたことは、王権の形式と内容とを示すものであつた。その故に、常陸国風土記における倭武天皇の伝承が大和の王権とは無関係な伝承であつたにせよ、天皇自身の巡狩ということに価値があればこそ、神々の巡幸と同じ意味で扱われているのである。

四 成務天皇・倭建命系譜——結び

景行天皇の次に位する成務天皇は景行の御子だが、その次の仲哀天皇は倭建命の御子である。景行と倭建命を二人一組と考えれば、成務か仲哀か何方かは余分である。

ここで話題を変えて、崇神天皇から始めて垂仁天皇・景行天皇・成務天皇そして仲哀天皇にいたる皇居の所在地を考へてみると、崇神天皇・垂仁天皇・景行天皇は大和に都を持ち、成務天皇は滋賀で仲哀天皇は山口から筑紫方面である。この成務天皇・仲哀天皇が崇神天皇以来の皇居の地である大和を捨てて、滋賀や筑紫へ移つたことの理由は明白でない。ただ、仲哀天皇が山口や筑紫に皇居を移したことは、書紀によれば、景行天皇西征の事績ということもあるし、何よりも朝鮮半島攻略の意図を仲哀記が示しているということから一応は理解できるが、成務天皇が滋賀に都した理由は書紀

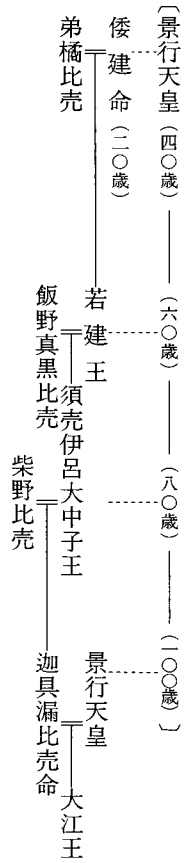
によれば、景行晩年の都が志賀高穴穗宮とあるので、それを引き継いだに過ぎないのであろうか。但し、古事記には景行が志賀に遷都したことは書かれていない。一方、書紀の成務紀には皇都の記事はない。成務は影の薄い天皇と言える。後世、天智天皇が近江の大津に都したことは、人麻呂が近江荒都歌の中に「いかさまに／思ほしめせか」との非難めいた歌句を残したにせよ、その理由にはつきりしている。しかし成務天皇の場合は外国の侵攻ということでも無さそうである。大和に宮都を定められない事情があつたのかも知れない。前にも触れたが、この成務天皇は旧辞らしい旧辞を持たぬ天皇である。日本書紀においても記すところは極めて僅かである。それなのに古事記によれば、宝算は九十五歳、書紀では百七歳である。これだけ長命の天皇が挙げて数える程の事績も残さないというのは全く不思議なことであるし、仮に相当の事績があつたにせよ記録されなかつたというのも奇怪なことである。その事績の不足する理由を詮索する前に、常識論で言えば、この天皇は架空ではなかつたのかという疑いが先に立つ。もし成務が架空の天皇であつたならば、景行天皇の皇統はここで断絶することになる。そして架空の疑もある倭建命の子が次の仲哀天皇となる。仲哀天皇は倭建命と父の腹違いの妹、布多遅能伊理毘売との間に生まれた御子である。なお、古代史家が仲哀天皇を架空の天皇と考へていることは既に触れた通りである。

先に述べたように、倭建命の原形は常陸国を中心とした在地伝承の中に有つた倭武天皇で、それを取り上げて大和地方で英雄として偶像化されたものかも知れぬと仮定した時、説明に困難を感じるのが古事記における倭建命系譜の存在である。天皇系譜に匹敵する長大な系譜の存在は、倭建命がかつては天皇として待遇されていたことがあつたという説を保証するように思われる。更に命の薨去によつて倭から下つてきた后たちや御子たちが悲しんで歌つたとされる歌が、天皇の大御葬に歌われる歌として定着していったということなど、偉大な存在であつたにせよ、一皇子に纏わる歌が天皇の儀礼の中に定着したということは、倭建命天皇説を一層補強するようにも思われる。

しかし、翻って考えてみると、倭建命系譜は量的には天皇系譜に匹敵するものがあるにせよ、六人の妃を娶って、各妃から生まれた御子は一人ずつで計六人である。それも地方豪族の娘であることが明らかな者が半数である。垂仁天皇の皇女、布多遲能伊理毘売以外は、海神の犠牲となったと伝える弟橘比売とか、出自不明の一妻とかで、どうも倭建命伝承を伝える人々の中から選んで寄せ集めた感が無くもない。次いで、天皇の大御葬の歌というのも、一種の神話的語り口であって、天皇の大御葬に歌われる歌を倭建命薨去の挿話に取り込んだものに違いない。

また、この倭建命系譜の中には現実では考えられない記述がある。それは、倭建命の曾孫にあたる迦具漏比売命が、倭建命の父、景行天皇の妃となって大江王を生んだという記事である。これは景行天皇の系譜の中にも出てくる記事である。この件について、古事記伝は「此は伝への紛れにぞありける」と断定し、倉野憲司博士も「これは何かの理由で系譜に乱れが生じたのであらうと思はれる」と推論しているが、そうだとしても、現代の常識に合わないことはすべて誤伝としてしまうのでは、例えば万葉の難読歌の文字を勝手に書き改めた昔の学者を一概に非難することは出来なくなる。したがって、その点についても多少は考えてみたい。

今、目安として日本書紀を利用して考えてみると、倭建命は景行天皇四十一年に三十歳で薨じた。その時、父の景行天皇は八十七歳であった。この書紀の年期を差し置いて、仮に男性を中心として考えた場合、男が二十歳で子を生み、その子がやはり二十歳で孫を生み、その孫が二十歳で曾孫を生んだとする。その方式に則ってこの問題を考えると、次のようになる。



この表に見る通り、景行天皇は百歳で結婚し、妻に子を生ませる可能性があるということになる。書紀の年期によれば、景行天皇は百三十七歳で迎具漏比売命と結婚し、大江王を生んだことになる。景行天皇は書紀によれば百六歳で崩御し、古事記によれば百三十七歳で崩御したことになる。しかし、こんな計算をするより、倭建命の存在が景行天皇より古人であったとすれば辻褃は合うが、それでは記紀の構成自体が崩れてしまう。こうした点から見ても、倭建命の実在ということは証明しにくいと思われる。

以上、児童に類するような論証さえ行ってきたが、大雑把に言えば倭建命は架空の人物であり、その所伝は古事記では景行記の中に於いて悲劇の英雄としての地歩を保ち、書紀では景行紀の中で王権に殉じた剛毅な武将の倂を示している。一口に言えば、景行天皇と倭建命は二にして一の関係を持ち、景行天皇記・紀の中では人物像としては表裏の關係を持っていると言えようか。それ故、思国歌さえも作者に就いては、記と紀との間に揺れがあるのである。

注

- (1) 吉井巖「倭建命天皇説に加える一微証」『天皇の系譜と神話 二二 所収。
- (2) 大久間喜一郎「意祁・袁祁の流浪伝承の構成」『國學院雜誌・第八十七卷五号。